

令和 5 年 4 月 26 日現在

機関番号：25407

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23131

研究課題名（和文）語りえぬものの伝承に向けたアクションリサーチ

研究課題名（英文）Action research for the transmission of the unspeakable

研究代表者

宮前 良平（Miyamae, Ryohei）

福山市立大学・都市経営学部・講師

研究者番号：20849830

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は災害後の被災者の「語り得なさ」をどのように次世代に伝えることができるかをフィールドワークを含むアクションリサーチによって明らかにすることを目的とした。その結果、「集合的トラウマ」への着目によって、復興過程におけるコミュニティの喪失が被災者の語り得なさを促進することが明らかとなった。また、そこにあるはずのものが写っていないという「不在」の写真によって、語り得ないものを語ってもらうのではなく、語り得ないまま、いわば空白のまま伝承する可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで概念的な研究が主だった「語り得なさ」の輪郭をフィールドワークによってあきらかにした点に本研究の学術的な意義がある。また、集合的トラウマのように語り得なさもまた個人的なものではなく、集合的に生じることが被災地での調査によって示唆された。これらの結果から、語り得ないものを語り得ないまま伝承することによって、語り得ないことが語りによって覆い隠されることなく伝承される可能性が示唆された。このことは本研究の大きな社会的意義であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The goal of this research was to investigate how the experiences of post-disaster survivors, which are difficult to put into words, can be passed down to future generations through action research that involves fieldwork. By focusing on the concept of "collective trauma," the study found that the loss of community during the recovery process made it difficult for survivors to express their experiences. Furthermore, photograph of "lacuna," which fail to depict what should be present in them, suggested that the unspeakable can be conveyed without actually speaking about it.

研究分野：社会心理学

キーワード：集合的トラウマ 被災写真返却活動 不在 半分当事者

1. 研究開始当初の背景

災害伝承とは、当事者が非当事者に向けて語るということの一形式である。そのため、災害伝承研究においては、当事者が語り非当事者がそれを受けとるというコミュニケーションの成否、つまり、うまく意味が伝達されたか否かが注目されてきた。

しかしながら、災害伝承をコミュニケーションとみなす論点には、実践的な瑕疵を抱えている。先行研究では、コミュニケーションを円滑に行うためには、当事者の語りに含まれる様々な矛盾を解消し、「意味の通った」語りにする必要性が論じられている。このとき、当事者の語りは、個々人が体験してきた一般化不可能な生の語りではなく、普遍化された大きな物語の一部に吸収されてしまっている。

このような一般化は、逆説的に災害の風化を及ぼしている。風化とは、忘却ではなく記憶の定着であり(永田・矢守, 1996)、つまり、記憶が普遍的な知識になると、とりたてて思い出すことが無くなっていくということである。そのため、災害の記憶の風化を防ぐためには、誰にでも当てはまるような普遍的な物語としてではなく、被災者一人ひとりの固有の被災・復興体験を一人称的に捉えなおす必要がある。

しかしながら、一人称的な語りについては、それを語る際の矛盾が指摘されている。例えば、不在を存在として語る矛盾(津波で流された生家の跡地で今日の前に我が家が存在しているかのように語るような事例) 当事者性の矛盾(かろうじて被災を免れた人が知人の被災者に言う「被災してなくてごめんね」というセリフにみられる事例) 時間の矛盾(実際に体験した過去のことをまだ起きていないことのように話すという事例)が挙げられる。これらの矛盾した語りを本研究課題では、「語りえなさ」と名付けることにする。

ここで問題となっているのは、「当事者が語り非当事者が聞く」という構造の限界である。このコミュニケーション構造のために、当事者の矛盾を抱えた語りは捨象され、非当事者にも理解されやすい物語へと回収されてしまう。では、どのようにして従来の災害伝承のコミュニケーション論を打破し、当事者の語りを取り戻すことができるのだろうか。

2. 研究の目的

本研究は、以上の問いに答えるために、被災者の語りにおける「語りえなさ」に注目する。本研究活動では、以下に詳述する主体的時間論(矢守, 2016)をもとに、「語りえなさ」を複数の矛盾した語りによる揺れ動きとして理解するための実践理論の構築を行う。

3. 研究の方法

本研究は主にフィールドワークによって行われた。東日本大震災の被災地の一つである岩手県九戸郡野田村で震災後から活動しているチーム北リアス写真班の一員として関わりながら、フィールドワークを続けてきた。チーム北リアス写真班では、津波で流出した写真の洗浄・保管・返却を行っており、当初は約8万枚あった写真も、返却が進み、現在では約1万3000枚となっている。

また、本研究の過程で「集合的トラウマ」に着目し、カイ・T・エリクソンの『Everything in its Path』の翻訳を通じて、集合的トラウマ理論の整理を行った。それと並行して、『Everything in its Path』の舞台となったアメリカウエストヴァージニア州バッファロークリークに訪問し、災害から約50年が経過したBCにおいて、どのような伝承がなされているのかを調査した。

4. 研究成果

その結果、「集合的トラウマ」への着目によって、復興過程におけるコミュニティの喪失が被災者の語り得なさを促進することが明らかとなった。つまり、集合的トラウマとは、災害によって個人が心理的なダメージを負うのではなく、災害前に当たり前に存在していたもの(たとえばコミュニティ)が災害によって壊され、復興によって崩壊されたことを隠蔽されてしまうことによって生じるトラウマである。このことは、バッファロークリークのみならず、たとえば東日本大震災後の東北の被災地でも問題になっている課題であり、現代にも通用する視座である。

では、どのように語り得ないものの伝承が可能になるだろうか。その鍵となるのが、そこにあるはずのものが写っていないという不在の写真である。本研究においては、津波で流され草が生い茂った駅跡地の写真を例に出した。その写真には、駅舎は写っていない。すでに津波によって流されたのだから。しかし、駅舎の部分が空白になっている写真は、「そこに駅舎があった

はずだ」という強い想起を可能にする。空白を空白のまま残しておくことの可能性がここで示唆される。つまり、語り得ないものを語ってもらうのではなく、語り得ないまま、いわば空白のまま伝承する可能性が示されたのである。これは、語り得なさの伝承のこれまでほとんど考えられてこなかった在りかたであると考ええる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 宮前 良平	4. 巻 7
2. 論文標題 「群像」を書くことの可能性：高森論文（2022）へのリプライ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 共生学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 184～193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90818	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮前 良平	4. 巻 6
2. 論文標題 <書評> 森直久（著）『想起 過去に接近する方法』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 災害と共生	6. 最初と最後の頁 1～5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/91043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮前 良平、藤阪 希海、上總 藍、桂 悠介	4. 巻 9
2. 論文標題 『サバルタンは語ることができるか』を共に読み共に書く：共生学の3つのアスペクトを中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 未来共創	6. 最初と最後の頁 243～275
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/88556	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮前 良平、置塩 ひかる、王 文潔、佐々木 美和、大門 大朗、稲場 圭信、渥美 公秀	4. 巻 21
2. 論文標題 実践としてのチームエスノグラフィ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 質的心理学研究	6. 最初と最後の頁 73～90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/jaqp.21.1_73	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮前 良平	4. 巻 5
2. 論文標題 サービス業化する災害ボランティアセンターにおける反「おもてなし」の可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 災害と共生	6. 最初と最後の頁 1~11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/84562	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮前良平	4. 巻 5
2. 論文標題 大学新入生たちによる外出自粛生活のオートエスノグラフィ : 文集「パンデミックを歩く」を題材に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共生学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 186-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮前良平	4. 巻 3
2. 論文標題 不在 の写真を見る / 撮る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 災害と共生	6. 最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/73153	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮前良平	4. 巻 6
2. 論文標題 「被災者の言葉を奪った」とはということか??小説『美しい顔』をめぐる論争から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 未来共生学	6. 最初と最後の頁 426-432
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/72136	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Miyamae Ryohei, Atsumi Tomohide	4. 巻 44
2. 論文標題 The Picturesque Movement: restoring photographs following the 2011 tsunami in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Disasters	6. 最初と最後の頁 85 ~ 102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/disa.12365	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 宮前良平, 高原耕平
2. 発表標題 災害後の故郷の発見の語りについての一考察
3. 学会等名 日本質的心理学会第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮前良平, 山田悠希
2. 発表標題 返却された写真はどのように保管されているか 被災写真返却後のフォローアップ調査より
3. 学会等名 日本災害復興学会 2022年度京都大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高原耕平, 宮前良平
2. 発表標題 南三陸町への東日本大震災後移住者の地域定着プロセス つながり・地域愛着・キャリアの関係
3. 学会等名 日本災害復興学会 2022年度京都大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ryohei Miyamae
2. 発表標題 Photograph of "lacuna:" the case of remembering and seeing unphotographed things in a tsunami-damaged photo
3. 学会等名 The 12th International Conference of the International Society for the INTEGRATED DISASTER RISK MANAGEMENT (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮前良平
2. 発表標題 復興による喪失としての集合的トラウマ
3. 学会等名 日本災害復興学会 2021年度岩手大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮前良平, 大門大朗, 高原耕平
2. 発表標題 集合的トラウマを正しく理解するためのレッスン - 集合的トラウマから見るトラウマ理論の新たな射程 -
3. 学会等名 日本質的心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮前良平
2. 発表標題 自粛生活中の集合的オートエスノグラフィの試み
3. 学会等名 日本質的心理学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮前良平
2. 発表標題 「被災写真」「写真救済」をめぐることば
3. 学会等名 日本災害復興学会2019年度鳥取大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮前良平・大門大朗・高原耕平・宮地尚子・高森順子
2. 発表標題 今こそカイ・T・エリクソン「Everything in Its Path」を読み直す
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮前良平
2. 発表標題 災害ボランティアにおける当事者性のジレンマ
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大門大朗・宮前良平・高原耕平
2. 発表標題 災害復興と集合的トラウマ：カイ・エリクソン『Everything in its Path』を読み直す
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮前良平
2. 発表標題 復興過程における 不在 の知覚について
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miyamae, Ryohei
2. 発表標題 The closer I get to them, the more distant I feel from them
3. 学会等名 The 10th Conference on Integrated Disaster Risk Management (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 栗本英世、モハーチ・ゲルゲイ、山田一憲、小野田正利、綿村英一郎、山本晃輔、木村友美、宮前良平、野坂祐子、白川千尋	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 222
3. 書名 争う	

1. 著者名 宮前良平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 318
3. 書名 復興のための記憶論	

1. 著者名 志水 宏吉、河森 正人、栗本 英世、檜垣 立哉、モハーチ・ゲルゲイ、木村友美、藤目ゆき、山本ベバリーアン、澤村信英、稲場圭信、渥美公秀、宮前良平、山崎吾郎、山本晃輔、藤高和輝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 340
3. 書名 共生学宣言	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関